

まち家

とざされたまど、しらないひと、
さみしい、かなしい、ひとりぼっち ...
でもうえをみてごらん
ここらじゅうはぜんぶ、きみのいていいはしょ
みんないっしょにくらしてる
ひとりじゃないよ、おおきいいがいました

背景

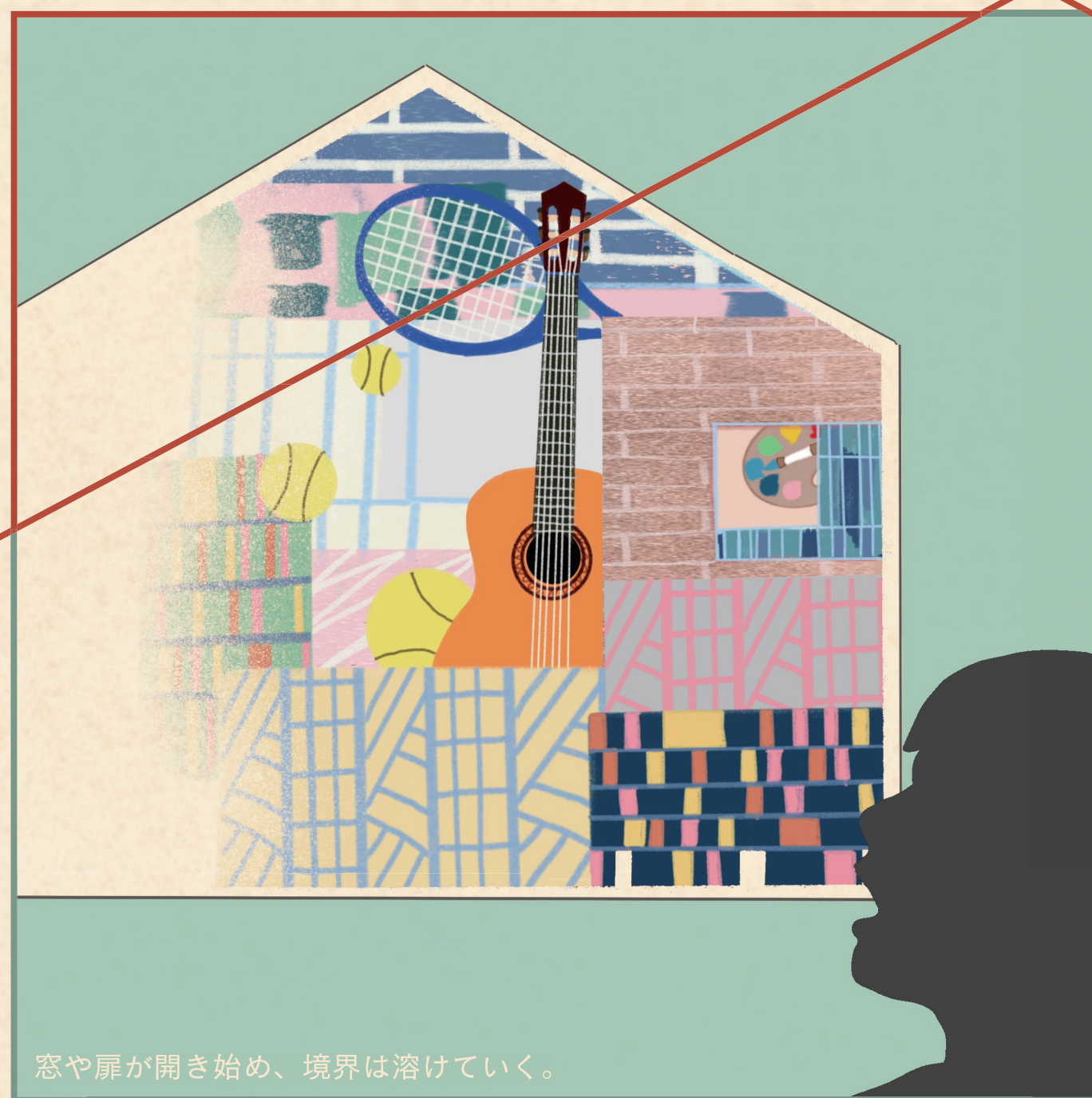
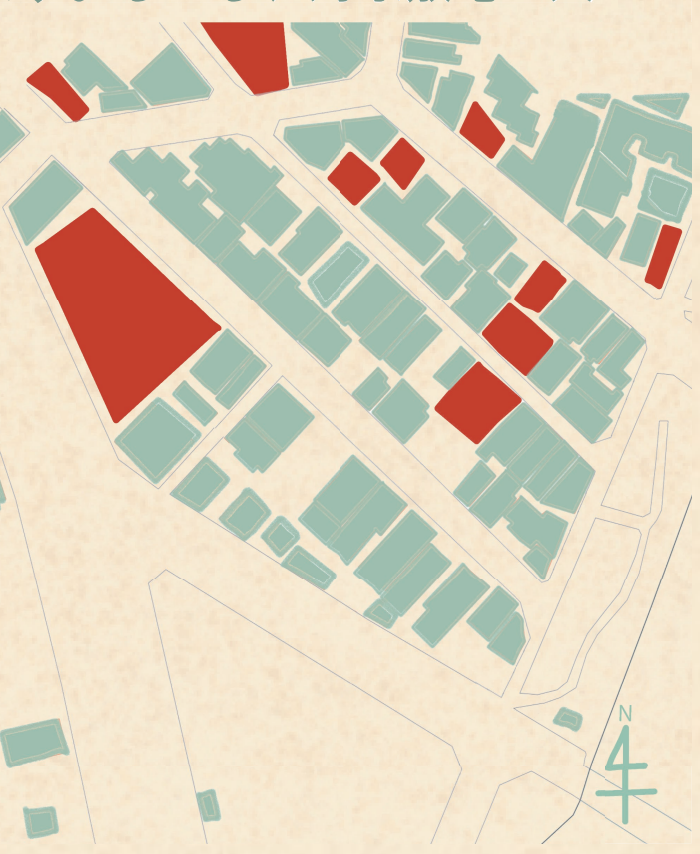
今日では、バーチャルなものが様々な角度で私たちを侵食していく反面、リアルな関わりはますます減ってきています。街を見ると、窓や扉が常に閉ざされ、人々の孤独がどんどん助長されているようです。

セルフネグレクトや孤独死などの問題が近年増えているのは、周りを気にせずひとりで生きることができるように見えてしまうからなのかもしれません。しかし、ひとりで生きていけるはずなどなく、私たちは誰かの助けを借りながら、時には助けながら生きていく他なりません。

そのため、「この町で生きているのはあなた一人ではない」と気づきを与えることが必要ではないかと考えました。

対象敷地：山口県宇部市新町の閑静な住宅街

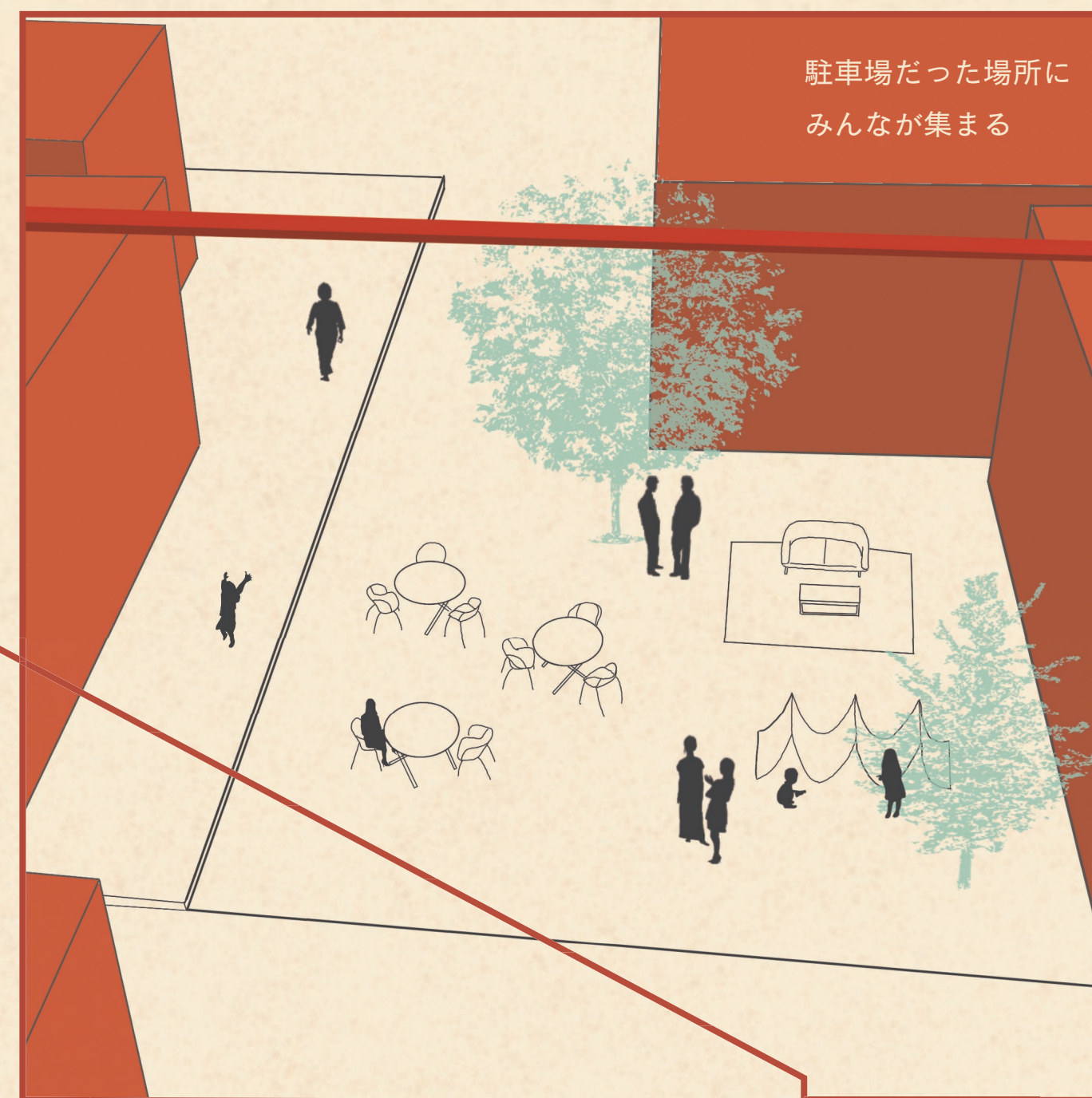
近くに海、川があり、潮のにおいが漂うこの住宅街は、地域猫が可愛がられ、夏は花火を家から見る事が出来る場所です。川のそばには小学校の通学路や、公園の遊具やバスケットボールコートがあり若い人々が集まります。しかし、対象敷地の人通りは一日を通してまばらで、通りに電灯がないため夜はかなり暗くなります。また、この周辺に住まわれている方は、回覧板を渡す程度の交流はあるものの、それ以外に積極的に交流を行うことはないそうです。さらに周辺には利用度の低い駐車場など低未利用土地（右図赤色）が点在しています。



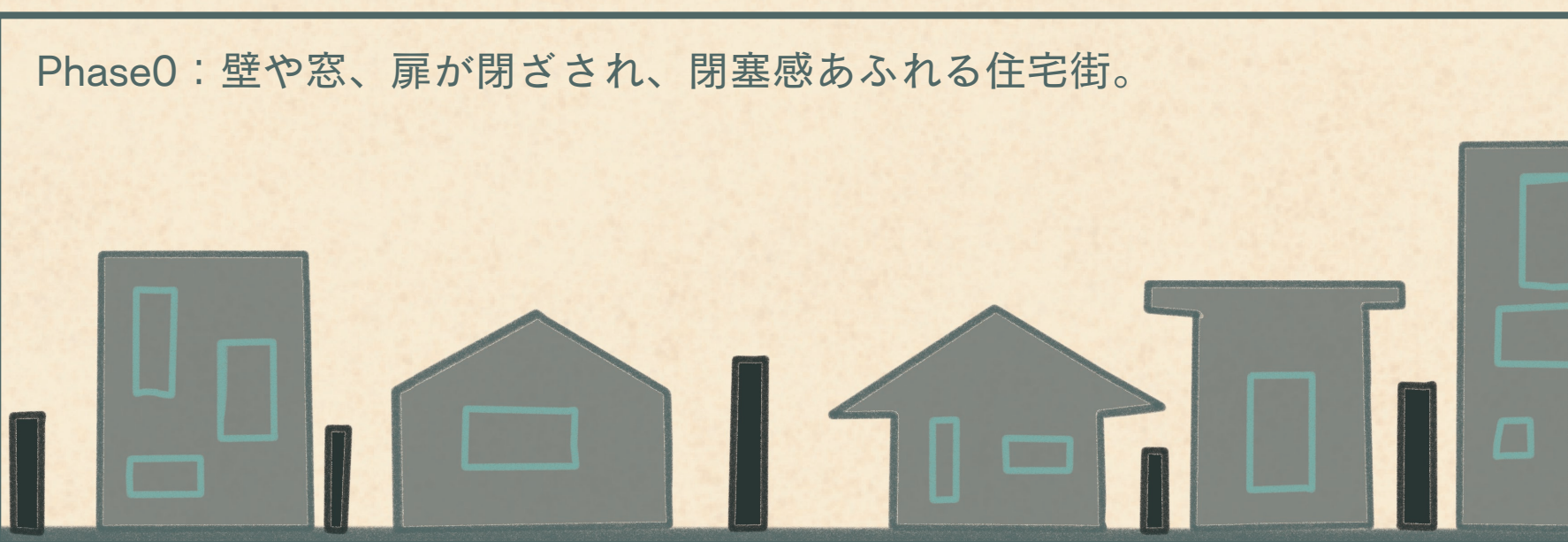
窓や扉が開き始め、境界は溶けていく。



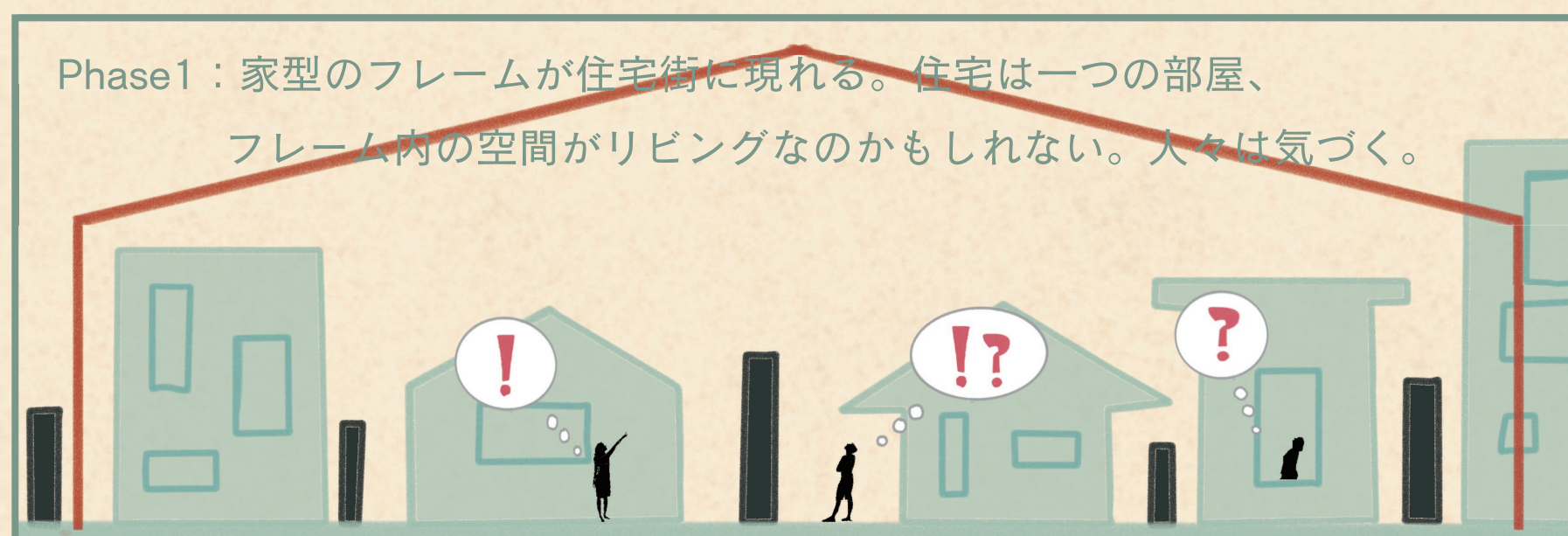
路地にできた
デッキで道端会議



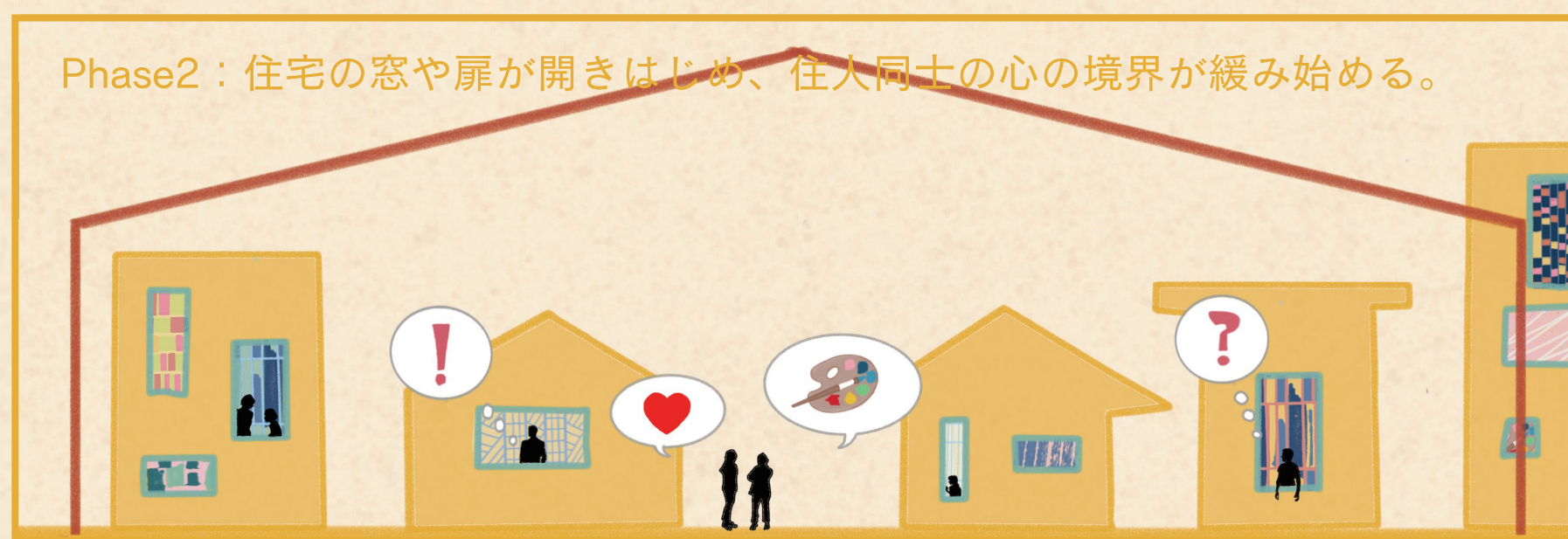
駐車場だった場所に
みんなが集まる



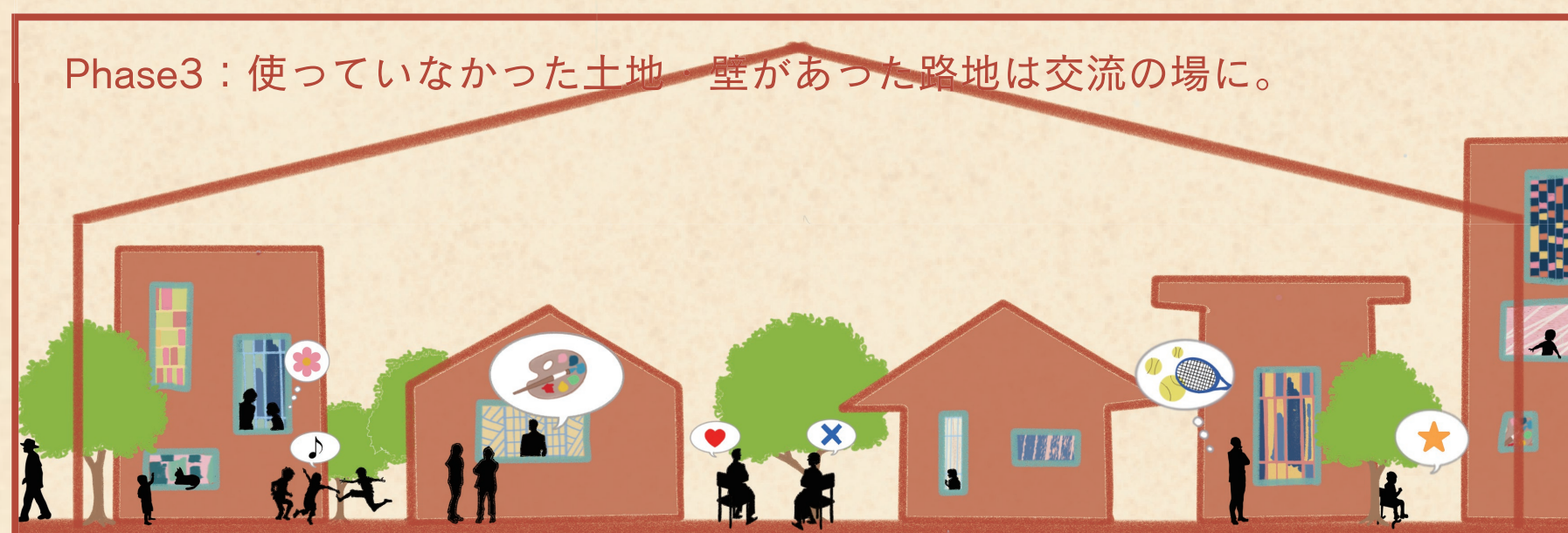
Phase0：壁や窓、扉が閉ざされ、閉塞感あふれる住宅街。



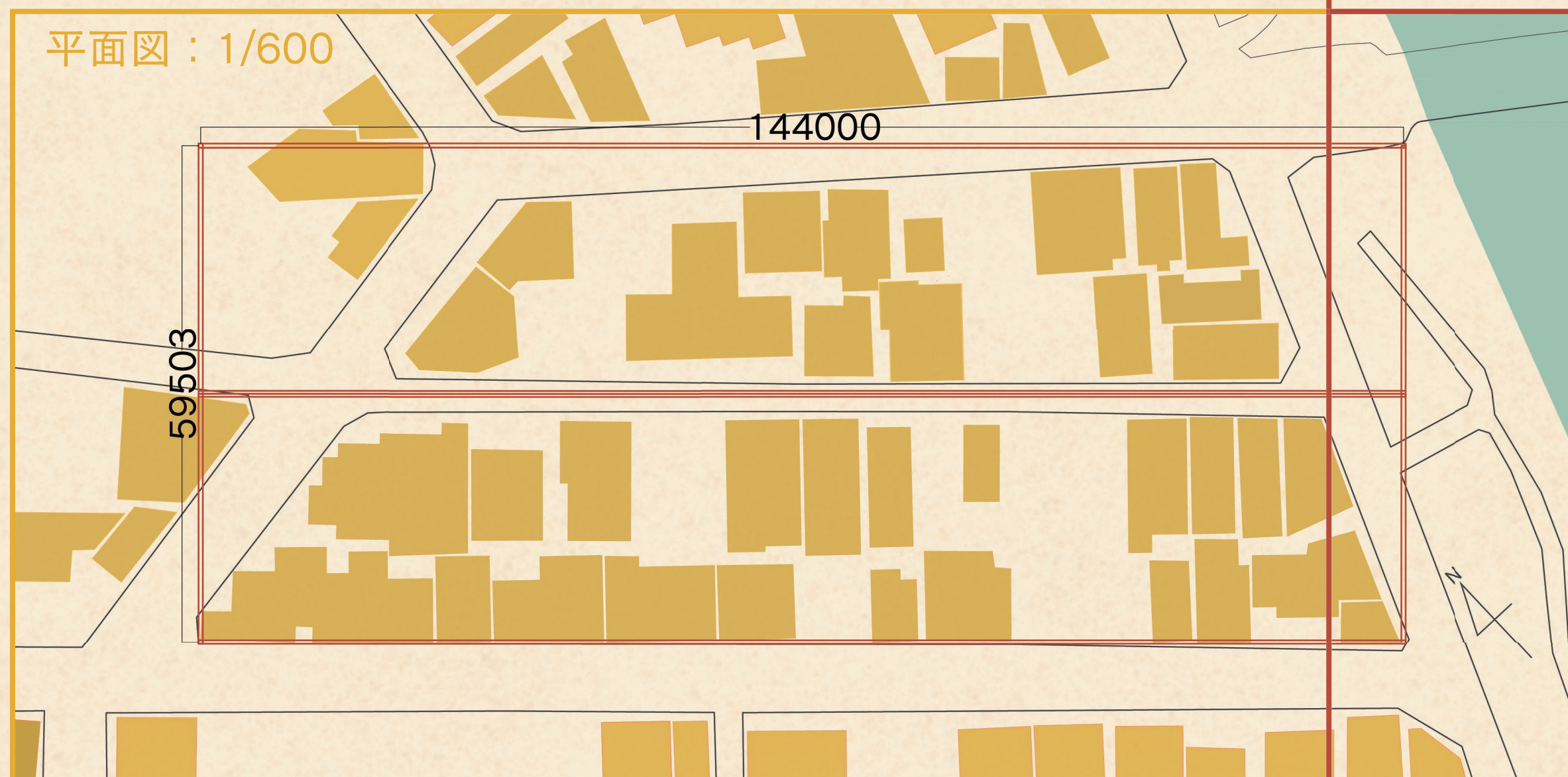
Phase1：家型のフレームが住宅街に現れる。住宅は一つの部屋、
フレーム内の空間がリビングなのかもしれない。人々は気づく。



Phase2：住宅の窓や扉が開きはじめ、住人同士の心の境界が緩み始める。



Phase3：使っていなかった土地、壁があつた路地は交流の場に。



平面図：1/600

